

が、これは競争論とかぎりず今後における経済学史研究の1方向を示すものとして注目されるであろう。しよせん経済学史研究はそのような研究によってのみ経済学発展にとって積極的意義をもちうるであろうからである。

- (6) 鈴木鴻一郎編『経済学原理論』下(東京大学出版局, 1962年), pp. 235—241, 477—492.
 (7) 宮本義男著『資本論研究』(大月書店, 1958年), p. 55. もっともそこでの見解は、表現を厳格にみかぎり、生産価格論での競争論は資本一般から競争への移行過程で論じられているということになり、後出の④での種瀬氏の見解にちかい。
 (8) 『資本論講座』第4巻(青木書店, 1964年), まえがき, pp. 6—7. 前出拙著『マルクス経済学』pp. 152—4 参照。
 (9) 競争論の課題については、前出の尾形論文, pp. 155—7. 磯村論文, pp. 37—38. また ⑤中 (pp. 84—85), 後出の ⑨中 (pp. 263—6), ⑩中 (pp. 3—8) にも指示されているが、くわしくは佐藤金三郎『「経済学批判」体系と『資本論』——『経済学批判要綱』を中心として——』(『経済学雑誌』31巻5・6号, 1954年12月), pp. 34—47 参照。だがここであらためて最近刊行された久留間鮎造編『マルクス経済学 レキシコン』第1冊『競争』(大月書店, 1968年)中の「競争について『資本論』の枠外に残されているものはなにか?」という小項目の部分 (pp. 71—93) についてこれをうかがうとつぎのように極く大雑把に要約することができるであろう。(i)「競争がひき起こす価格変動」, (ii)「世界市場での競争」, (iii)「賃金や労働日の均等化」, したがってまた剰余価値率の均等化が各種の地方的障害によって妨げられる」こと, 「このよ

うな摩擦」, (iv)「需要供給関係が作用するための基礎」, 需要供給の「もっと深い分析」, (v)「不断の不均等の不断の均等化」の速度を左右する資本および労働力の移動の可能性が前提する諸要因, (vi)「利潤率の低下がどの程度まで価格の上昇と合致しうるかについての研究」, (vii)「利潤率低下傾向を阻止する最も重要な原因の1つとしての「労働力の価値以下への賃金の引下げ」, (viii)貿易, ことに植民地貿易に投下された資本があげる比較的高い利潤率によって一般的利潤率は高くされるかという問題」, (ix)投機, 商業資本の分割, (x)利潤の偏差, (xi)独占価格, (xii)景気循環。ちなみに本書の内容をここで紹介しておくとしよう。本書はマルクスの著書, 論文, 遺稿, 書簡中から競争について論及している箇所(合計176の典拠)を収録したものであるが、ただ単にあつめただけではなく体系的に大小の項目によって整理しており、きわめて利用価値に富んでいる。なお『資本論』以外のものからの採録にさいしては、『資本論』の理解に役立つかどうかを基準にして選択がおこなわれているという点に本書の特色——『資本論』の生成史研究というよりも原理的研究にとってより一層役立つであろうという特色——が存している。本書の篇別(大項目)は、「Ⅰ. 競争にかんする一般的諸問題」, 「Ⅱ. 作用からみた競争」, 「Ⅲ. 当事者からみた競争」, 「Ⅳ. 競争にかんするその他の重要な諸問題」の4つに分かれ、それがさらに計34の小項目に分かれている。本書が私たち競争論の研究者にとってくめどもつきない泉のような意義を有することはいうまでもない。『レキシコン』はひきつづき、『方法(唯物史観を含む)』, 『恐慌(産業循環を含む)』, 『貨幣』などの刊行が予定されているようである。

(10) 注(6)参照。

(1968. 8. 28.)

マルクス主義思想の継承と発展

山 口 和 男

はじめに

はじめ編集委員会から依頼された題目は、「マルクス経済思想の展開」であつたけれども、評者は自身の問題関心にひきよせて論評を試みたいと考え、諒承を得て上の題目に変えた。というのは、広くいって最近の社会思想史研究においてマルクス主義思想史がとり上げられることは多いが、その場合に問題が単に経済思想や理論の展開史の視点より提起されるよりも、むしろそれぞれの思想が、それぞれの直面した歴史的現実にとどのようにかかわっているかを、総体的に見さだめようとする傾向が強いと思われるからである。もちろん、あとでもふれるようにマルクス主義の内容把握は、研究主体のそれぞれにおいて異なっている面があり直ちに一義的に確定しがたいが、何らかの形でそれを現代に生かそうとするならば、過去のマルクス主

義思想家をとり上げる場合にも、その思想が経済理論のみならず政治観その他をふくめて、全体として歴史とどう対決しているかが研究の焦点となるのである。そしてひとつには研究者の置かれている現代の状況が、マルクス主義思想の全体的把握の再検討を促しているがゆえに、一層そうだといえる。

すなわち周知のように、一般に1950年代末からマルクス主義内部での「正統」批判の禁制が急に剝落させられ、さらにわが国ではとくに60年以後の諸体験がマルクス主義の新しい全体像の確立を要請して来た。それによって従来異端視されたり、あるいはタブーとされて来た思想や理論の系譜もまた思想史研究の対象として光を当てられるようになった。たとえばイタリア・ミラノのフェルトリネッリ研究所のデル・ボー教授は、1956—8年頃からの研究所の研究活動にふれて、この間の事情を、つぎのようにいう。「一般的要因と

しては、マルクス主義研究の組織の面で、殆どすべての国で、国内的・イデオロギー的閉鎖をおびていた戦争直後の一時期が終了して、国際的に緊密な文化交流の時期が始まったことが指摘できる。さらに、やはり国際的規模において、マルクス主義研究の基礎にある思想動向の面で、マルクスの純粋でオリジナルな思想を中心に設定してきた展望、ヨーロッパにおける民主的文化の再生の最初の数年に対応していた展望が、今や不均等で緩慢にではあったが、他の展望ととして代る傾向にあった。中心問題はもはや、マルクスのマルクス主義、その直接の前提、各国への直接の伝播ということではなく、マルクスに触発された思想運動全体、それぞれの面においてオリジナルで重要な現象をあらわしている「マルクス主義全体」ということにあった」(「マルクスとマルクス主義」イタリア図書、39号、1967年8月)。

こうして世界的にもまたわが国においても、さまざまな新しい視点からするマルクス主義思想史研究が続々と現われることになり、たとえば評者の関心をもつドイツ社会民主主義思想史の領域では、西側においてもまるでSPDブームかと思わせるばかりに研究は活況を呈した。そして資料的にも厳密な考証にもとづくすぐれた研究が刊行された。わが経済学史学会関係に限ってみても、マルクス、エンゲルスあるいはレーニンの諸命題をそのまま絶対的基準として、それによってあるいはそれからの距離によって、諸々のマルクス主義者の思想を裁断するという仕方ではもはやなくて、それらの諸命題をひとたびは相対化して、それ以外の諸要素を吸収しつつ歴史のコンテクストの中に位置づけてつかむという思想史研究の新傾向と成果があらわれて来た。マルクス主義が歴史の変革を志向する思想体系でありながら、それが主体たるそれぞれの個人に受容され継承され、そして現実を動かす行為として実現されてゆく過程で、逆に歴史によって規定をうけるという思想の運動のダイナミック、その追究が最近のマルクス主義思想史研究の著しい特徴だと評者には思われる。もちろんこのような研究方法は、他方でのマルクス経済学の理論的分析の深化によって補われつつ進行するのである。

編集委員会から委託された課題を、評者は自己の以上のような問題意識にひきよせて解釈し、マルクス・エンゲルス以後からほぼ1930年頃までのマルクス主義思想史を扱った本学会々員の著作・論稿を1960年からのちの分について経済学文献季報によって抽出し、問題意識別に整理し論評することにした。もとよりここでは網羅的な文献目録の作製が目的ではないので、評

者の判断によって取捨選択を行なったし、また抽出の際に脱漏したものもあり得るので、この点あらかじめお断りしておかねばならない。なお関係文献の抽出については保住敏彦氏(京都大学)に労をわずらわし、また評者自身の論文についての論評は、久松俊一氏(関西大学)に執筆して頂いた。両氏の御協力に謝意を表したい。

I 著書および関連論文

まずマルクス主義思想史の流れを全体として通観し、統一的にその発展のダイナミックを見ようとしたものとして、水田洋の一連の労作がある。すなわち『マルクス主義入門』(1966年、光文社)、『現代とマルクス主義』(1966年、新評論)および「マルクスとマルクス主義」(『現代の理論』49・50合併号、1968年2・3月号所収)である〔以下順に①②③と略記して引用する〕。②は、それまでに発表された諸論文を訂正・加筆してまとめられたものであるが、これらすべてを通して著者の提出した問題はつぎの通りである。まず著者は、自己にとってマルクス主義は思想史研究の対象であるとともに方法でもある、という観点から出発する。すなわち「マルクス主義は、近代西ヨーロッパの合理主義と歴史主義を、ヒューマニズムを核心として統一した思想」(②、p.2)であるが、それはだれにとってもまったく同一の、固定した科学の体系ではなくて、各個人がそれぞれの問題に対処する時の、ある共通の前提あるいは方法であり、またその具体的で多様な適用であり、閉じられた体系でなく開かれたものとする。そしてマルクス主義を方法として用いること——すなわち歴史的＝批判的方法を用いること——を通して、対象としてのマルクス主義に迫ろうとするのである。このような観点から著者においては、マルクス主義思想史はいわば方法の歴史として位置づけられることになる。

さて前記の諸労作を通して、著者は、マルクス・エンゲルスをはじめ、ベルンシュタイン、カウツキー、ルクセンブルク、ブレハーノフ、レーニン、スターリン、トロツキー、ルカーチその他コミンテルンとファシズム期の多数のマルクス主義者、さらには「新左翼」を含めて現代のマルクス主義の動向にまで説き及んでいる。この鳥瞰図の範囲はすこぶる広く、そこに盛られた材料——ヨーロッパ旅行による見聞をふくめて——はきわめて豊富である。それらをここで限なくとり上げて検討することはできないから、著者の構想の基本的な枠組みだけをとり出してみよう。

まずそのマルクス把握の第1の特徴は、マルクス思

想が諸々のヨーロッパ近代思想の継承の線上で、しかもそれと断絶しその克服を目ざすものとして捉えられている点にある。青年マルクスの受けた啓蒙の合理主義とロマン主義の影響の重視、レーニンの指摘したといわれる三源泉〔……実はこの三源泉はレーニンよりも早くすでに1908年に、カウツキー、パルヴスによって指摘されていたのだが……〕のほかに、マルクスに革命的ロマン主義を育てた空想的社会主義思想の影響の指摘、これらを通じて著者は「生活全体に浸透した重厚なヨーロッパ文化の上に、がっちり構築されたものがマルクス主義」(①, p.25)であり、その土台はブルジョア文化の最良の遺産にはかならないことを強調する。第2に、このように近代思想を継承したマルクスが逆にその克服へと回転したのは、はかならぬ当時の後進国ドイツにかれが立っていたからであり、「近代の＝ブルジョアの人間解放が、現実におこなわれなかったために、かえってドイツでは、その解放の欲求が、全人間的解放へと急進化してゆくのであり、そういう解放は、人間を完全に喪失しているために人間の完全な回復を要求する、特殊な階級によってのみ、可能なのである」(④, p.46)と考える。先進国よりもむしろ後進国において矛盾が重畳しているがゆえに、ラディカルな解放への展望がひらけるといふ発想は、この著者の思想史研究の重要な基軸をなしている。第3に、この人間解放を担う主体がマルクスにおいては、はじめ、1830—40年代ドイツの窮乏化する原始的プロレタリアートを念頭に表象されており、ついで『資本論』段階のマルクスでは、もはや物理的・生理的窮乏から自然発生的に絶望的蜂起に至るのではなくて、物質的・文化的向上の要求を掲げて資本主義社会をつきやぶる、規律と組織を身につけたプロレタリアート像へと旋回している、と著者は考えるのである。こうして著者は、マルクス主義の革命思想の核心に迫るのに、解放の担い手として表象されたプロレタリア像を以てするという方法をとるのである。そして、またこの点から、プロレタリアの闘争における自発性と組織的指導性の問題、一般に運動における主観性・意識性の問題がひき出されているのである。

マルクス把握のおよそそのような枠組を用いて、著者はマルクス・エンゲルス以後のマルクス主義の継承と発展、多様で対立と論争に富む思想の運動の流れを把握する。すなわちナロードニキの共同体思想に代表される後進国ロシアとフェビアン的地方自治体思想に代表される先進イギリスを両極として、その中間にドイツ・フランスが位置づけられ、これらの座標軸の中でそれぞれのマルクス主義思想が検討されるのである。

資本主義の発達によって先進国の仲間入りをした19世紀末ドイツの、小市民化した現実主義的プロレタリア像の上に構成されたベルンシュタインの思想、同じく西欧先進国意識に支えられてはいるが、経済発展によって自動的に社会主義に到達する理想主義的な大衆像を描いたカウツキー、後進国ポーランド・プロレタリアートの原生的エネルギーを見て、先進国ドイツ・プロレタリアートの自発的な階級意識の昂揚を期待したルクセンブルク、後進農業国ロシアの農民の革命的エネルギーをプロレタリア戦列へ汲み上げ、そしてこの後進性を克服すべく、質的に高い精鋭によって党を組織し大衆に理論を注入しようとしたレーニン、そしてひきつづくべき世界革命を伴わなかった、後進国革命の高価な代償としてのスターリン以後のマルクス主義諸思想等々。

近代思想の継承と断絶という位相の中にマルクス思想の成立をとらえ、後進国の現実が思想にかえって近代を超える起爆力を与えるという著者の視角は、評者も基本的に同感する。しかし一連の労作を通じて、マルクスと啓蒙主義的合理主義・ロマン主義とのストレートな接続がうまく印象づけられ、いうところの断絶面の理解の内容がそれに比して暗い。さらにいくつかの類型のマルクス主義思想を、先進国・後進国という軸で位置づけるのは、ひとつの手続きとして有効だけれども、それが常套化すると分析は精緻さを欠き、また著者がつねに排撃してやまぬ基底還元主義に陥るのではないか。たとえばベルンシュタインの場合、ドイツが先進資本主義に仲間入りしながらもなお残る封建遺制を問題にしている、つよい反封建の志向があったのであり、それを見ないで民主主義要求を第一に打出していたかれの政治主義が出てこないと思われる。プロレタリアート像とその自発性も上の軸との関係で説かれているけれども、より広い全体的な視角が必要なのではあるまいか。しかしそもそも100年以上にわたるマルクス主義思想の巨大なうねりを、固有の視点から展望しつくすのは並大抵のことではない。「組織にせよ、客観的認識にせよ、各個人が主体的に選択し参加しなければ、歴史をうごかす力とはならない」(③, p.10) 現代において、それぞれが己れの中なるマルクス主義像を表出して対話し合うことはとりわけいま必要であり、その意味でこれらは大胆で有意義な問題提起の研究であると、評者は考える。

さて、マルクス主義の継承と発展という主題に関して、特定の対象をえらんで内在的な分析を加えたものではないが、マルクス以後のマルクス主義の発展を把握する場合の視角の設定について、河野健二が独自の

見解を示している。『思想史と現代』（1967年、ミネルヴァ書房）、「現代マルクス主義の2つの立場」（『思想』527号、1968年5月）、「現代史の基礎にあるもの」（河野編『新しい歴史観』〔現代人の思想〕13巻）1968年8月、平凡社）〔以下④⑤⑥と略記〕がそれである。これらを通して著者は、過去にも現代にもあるさまざまなマルクス主義の理由と由来をさぐろうとする。その際、著者の考えている現代の問題状況から、このことが問われているのである。すなわち著者によれば、いうまでもなく現代は「資本主義から社会主義への過渡期」として位置づけられる。しかし資本主義は19世紀の諸概念では抱えきれぬ程の変貌を示し、一方では富の稀少性のもつ制約力が弱まり、社会は全体的に政治化し、政治が日常化し、他方で大衆の非政治化が進行している。またマルクス主義の実現形態としての社会主義は、民主主義の全面開花や国家の死滅の予想とは異なった現実を示しているという。そうした複雑な現代世界において、資本主義から社会主義への変革を導くべきマルクス主義は、著者によればマルクスの個々の命題を原形のまま固執するのではなくて、創造的に相対化されねばならない。そのためには、たとえば当時実際のプロレタリアートの動向に密接しないで、むしろ「超越的であり、多分に理想主義的であった」(④, p.13)マルクスのプロレタリア像に対して「労働者の自己管理」を示唆するブルードン理論を、そしてまたプロレタリア独裁という理論のテロリズムに対して、ルソーの直接民主主義を再評価せよというのである。

マルクス主義のおかれている現代の状況をこのように見た上で、著者は20世紀のいくつかのマルクス主義思想をつぎのように特徴づける。ロシア革命によってレーニンが打樹てたものは著者によれば、プロレタリア独裁の社会であったけれども、後進国ロシアにおける革命のゆえに、かれはそれが西欧の社会主義化にひきつがれることを何よりも待望し、そして勝利したロシア社会主義が民主主義を完全に実現し、また人類を国家の死滅に導くよう期待した。しかしプロレタリア革命の勝利と社会主義の建設は、元来、別個の事であって、レーニンのこの希望は、不幸にも一国社会主義の建設を余儀なくされた条件の下で、スターリンによって歪曲されたという。そしてそれ以後マルクス主義は、西ヨーロッパあるいはアメリカには定着せずむしろ対流としての社会民主主義を生み、マルクス主義はもはやプロレタリア革命の指導原理としてよりも、かえって農民革命や民族革命の指導原理として実践的有効性をもつに至ったと著者は考えるのである。中国革命はそのひとつであり、土地革命を遂行しながら毛

沢東は、革命運動を中国の伝統と結びつけた実践道徳としての民主主義にもとづいて運用したのであって、この点に中国革命の特殊性があると著者はみるのである。しかし中国革命が本来民族解放闘争として闘われたことが、この国の解放後のあり方をも規定し、民族主義的な偏りに陥ることを避け得なかったというのである。

レーニン以後のマルクス主義の展開を以上のように一望にして、著者は現代の問題として、ブルジョア国家の中に社会主義の橋頭堡を確保しつつ社会主義への道を切りひらこうとするイタリアの構造改革運動と、社会主義体制の中で直接民主主義を維持しようとするユーゴスラヴィアのプロレタリア民主主義の実験を、マルクス主義思想の新しい展開として評価するのである。著者の以上のような見解は、素材の検討を通じた精密な論証を伴ってはいないが、著者特有のドグマに捉われないプラグマティックで自由な発想による、意味のある問題提起として、今後のわれわれ自身の思想史研究に有効に生かし得るものだと思う。

ところで本格的なマルクス主義思想史研究の力作として、見逃しえないのは、田中真晴『ロシア経済思想史の研究——プレハーノフとロシア資本主義論史——』（1967年、ミネルヴァ書房）〔⑦〕である。これはかねてからレーニン、ウェーバー研究に打込んできた著者が、マルクス以後におけるマルクス主義経済学展開の方法論的性格についての問題意識をもって、ここ数年間に発表したプレハーノフ研究の集大成である。この浩かん膨大な本書の内容紹介については本号書評欄に譲り、ここでは、その問題意識、分析方法、そしてその成果について簡単にふれるにとどめたい。

著者が本書に附した第二の副題は、「プレハーノフとロシア・マルクス主義理論の形成」である。すなわち経済学史研究の視野をロシアにまで広げるとい一般の課題とともに、ロシアにおけるマルクス主義理論の展開をその原点において把握しようとする、きわめて興味ぶかい問題提起がなされているのである。「マルクス主義がロシアに入り、そこでひとをつかみ、現実変革の力となってゆくばあい、それがまさにロシアの土壌に根づいたということ自体のうちに、そしてさらにはロシアの問題を中核として世界がみられることにおいて、ロシアにおけるマルクス主義は、現在のわれわれからみてその意義をどのように評価あるいは裁断するにせよ、たんにマルクス主義一般ではなくて、一定の型的特徴をもたざるをえなかった。まさに型的特徴をもってくるところに、思想の発展というものがある。思想が生きているしるしである」(⑩, p.6) との

べられている通り、いわば諸マルクス主義の類型化の志向が著者にあり、理論と思想の運動をひとたびは歴史の相の下に理解し、現代の実践的関心に迂回的にそれを投げかえそうと著者は試みるのである。もちろん著者のロシア・マルクス主義把握の基軸にはレーニンが据えられているのだが、そのレーニン像自身をこの型的特徴において表象することが必要であり、また現代それが可能だというのである。

しかし著者がプレハーノフ思想に迫ろうとする場合、ただちにロシアの現実との直接的なかわりにおいて捉えるのではなく、かれの現状分析と歴史認識とが抽象化され理論化された地平で追究されているのである。一方でのかれの政治経済論と、他方で哲学とを併せて思想の全貌をつかもうとして、著者は、資本主義論＝唯物史観論を分析の中軸におくという、まことに有効な方法が採用されている。この方法によって、経済理論と歴史理論を契機として内に含みかつ実在への視線をもつような経済思想史叙述の狙いは、成功しているといえよう。

この方法によって、70年代より90年代へのロシア資本主義論争の起伏、そこでのナロードニキ、合法的マルクス主義者の動向、「ロシア・マルクス主義の父」プレハーノフのロシア資本主義論、ロシア社会論、そして資本主義法則論とその帰結としての非連続2段階革命論、レーニンの「恋慕」の冷却の過程などが明らかにされ、これらを通して古典的マルクス主義者であり「客観主義的」側面をもったプレハーノフ・マルクス主義の性格が総括され、かれの革命家としての敗北にもかかわらず、その理論から何を遺産として受取るべきかが見事に示されている。

分析は詳細・精密であり、全篇に周到な配慮が漲っていて、まさに第一級の水準の労作である。しかし敢て欲をいえば、プレハーノフの伝記的考察もくわしくかれの理論の微妙な屈折のあとが細心に追われているが、ロシア・マルクス主義の第一世代として19世紀の中葉から20世紀のロシア革命後まで激動の時代を生きたプレハーノフの人間像の大きな動きが、余りに鋭利な分析的叙述の中に抑制されているのではないかとの印象をもつ。最後に、著者がロシア・マルクス主義を扱う中で大きく立ちあらわれて来た問題、たとえば社会主義における市民社会の問題、マルクス主義における継起的発展論的認識と構造的類型的認識の関係の問題を、ロシア・マルクス主義の基軸レーニンにおいて、著者が明らかにすることを待ちたい。

以上のほかに、固有の思想史研究ではないがSPDの財政政策をとり上げて、1914年の戦時予算協賛問題

へ迫ろうとした広田司朗の力作がある。『ドイツ社会民主党と財政政策』（1962年、有斐閣）〔⑧〕。内容に立ち入るのは割愛するが、わが国のSPD研究においてはじめて本格的にプロトコルその他の第一次資料にまで分け入った点で、それ以後の思想史研究にも大きな刺激を与えたものとして特筆すべき劃期的研究といえる。

Ⅱ 個 別 論 文

ドイツ社会民主党のマルクス主義思想についての研究も数多いが、そのうち党を全体として捉えた包括的なものとして、浅井啓吾の力篇がある。すなわち「ドイツ社会民主党史研究序説」（上）（関東学院大学『経済系』57号、1963年7月）、同（下）（『経済系』59・60号、1964年3月）、「ドイツ社会民主党の国家論」（『経済系』62号、1964年10月）、「晩年のエンゲルスにみるドイツ革命の戦術論」（『経済系』68号、1966年3月）、「第一次ロシア革命とドイツ社会民主党」（『経済系』69号、1966年6月）、「ドイツ（1918—20年）における社会化の動向と挫折の思想的背景」（『経済系』76号、1968年3月）〔以下⑨⑩⑪⑫⑬⑭と略記〕である。⑨⑩⑪は、1914年8月のSPDの帝国主義戦争への屈服と戦後革命の敗北の原因をさぐるべく、ビスマルク・レジーム下の党の在り方から90年代はじめの論争にまで説き及んで、修正主義（フォルマル・ベルンシュタイン）、中間派（ペーベル・リープクネヒト）、そして正統派（カウツキー）の三派の分出・成立の過程、さらにその三派の吸引と反発の歴史を主として農業綱領論争を中心に追求し、相互の論理のダイナミックを折出している。⑫はベルンシュタイン・ペーベルとの対比でエンゲルスのドイツ革命像をつかみ、⑬は修正派・正統派の第一次ロシア革命観を分析し、とくにカウツキーとレーニンとの共通性と相違を明らかにしている。分析は詳細で遺漏がなく（ただし⑩、p.58「強制的騰起」Zwangsversteigerung は「強制競売」であろう）展望も大きいけれども、三派のそれぞれを著者の考えているマルクス基準から測定して位置づけ、あるいはそこにあるレーニンの要素と非レーニンの要素を腑分けしたりしているため、結論的にはSPD断罪論に陥っていること、理論と政治とが二分（たとえばベルンシュタインの扱い方）されていて思想が全体として扱われていないこと、ほぼ農業綱領論争を契機として分出してくるツェトキン、パルヴスそしてのちにローザ・ルクセンブルクなど急進派の出現が視野に入っていないこと等々の不満が残る。しかし全体としては、国家論と中間層問題を中心に構えた分析の切れ

味が鋭い。一般に思想史研究は、個人の主体を中心にそれを単位として進められるが、その集合である政党の思想史を叙述する場合、どういう方法がとられるべきか、今後の共通の課題であろう。

同じくSPDと第2インターナショナルをとり上げたものに、広田司朗「団結の理想と分裂の現実」(河野健二編『マルクスと社会主義者』、『思想の歴史』9)1965年、平凡社)〔15〕がある。修正主義発生の現実的基盤、その具体的な契機、ベルンシュタイン・カウツキー・ルクセンブルクの所説の検討、実践上における対立の出現と党の右旋回、そして第2インターの全体としての修正主義化とナショナルリズム化などが、見通しよく整理され位置づけられている。全体として資本主義の発展・変貌という基軸の上に諸事実が論理的に構成されているが、三派の対立が理論面と実践面とに分けて分析されているため、思想としてのまとまりや動きがつかみ得ない感がある。

1918—9年のドイツ革命期のSPDをとり上げたものとして、阪上孝「ドイツ革命と社会化論争」、「社会化の挫折とその思想的根拠」(京大『経済論叢』98巻1・2号、1966年7・8月)〔16〕〔17〕がある。これは革命の高潮期に労働者階級から打出された生産手段の社会化の要求が、社会民主党政府によって骨抜きにされ、生産関係変革の視点を喪失させられ、ついには炭鉱資本家のシンジケート結成という反対物に転化して行った過程を追った上で、この社会化挫折の原因をSPDの伝統的な思想体質とりわけ社会主義観の中にもとめ、党全体にある崩壊ドグマと改良的实践の癒着、連続的・進化的な社会主義移行論、革命の政治過程と経済過程の分断、権力を担う主体としての労働者階級の知的・道徳的成長の待望などが明確に把握されている。もっとも、戦前・戦後のSPDの変化、とりわけロシア革命の与えた衝撃や教訓など、補われる点も多いように思われる。

ベルンシュタインに関しては、熊谷一男のすぐれた長編論文「ベルンシュタイン『修正主義論』の再検討」(井汲・佐藤・水田・長洲編講座『現代のイデオロギー』第4巻、『現代資本主義とマルクス主義』1962年、三一書房)〔18〕がある。1962年に執筆されたこの論文は、現代の時点でマルクス主義における歴史的現実への対決形式を探ろうとする意欲に支えられて、「理論の多様化を許容しうる条件」〔19〕, p.145)のもとでベルンシュタインを素材として「修正主義」の検討を意図した力作である。すなわち帝国主義段階に到達した資本の論理が中間層を把握し体制内に統合しようとする過程で、それを奪還して、労働者階級の下に対

抗結集してゆくべき能力を欠いたSPDにおいて、現実の変化を読みとって新しい党の在り方の問題を提出したベルンシュタインの見解を方法論から掘りおこして検討を加え(段階的認識の欠如の指摘)、さらにそれと対決しようとした諸理論を主としてカウツキーとレーニンについて、その現実への対決の姿勢を抉出している。帝国主義論への理論的アプローチの視角が据えられていて、思想史研究としてユニークであり、また変化する現実の中でマルクス主義が理論を構築する場合の一般的な方法的基準の反省なども提示されていて、内容は豊富である。

単純な修正主義断罪論から脱却して、ベルンシュタイン再検討を訴えたものに、久松俊一の連続論文「ベルンシュタイン社会経済思想の生成」、「ベルンシュタインの社会観」(京大『経済論叢』99巻5号・100巻1号、1967年5月・7月)〔19〕〔20〕がある。これは、いわゆる修正主義者たちの政治潮流からベルンシュタインを一応きりはなして、その思想的個性においてベルンシュタインをとらえ、『諸前提』で完成されるその思想体系の理解への視角を確立し、さらにひろくマルクス主義思想の大きな流れの中でベルンシュタイン修正主義思想の問いかけの意味をつかもうとするものである。そのためにかれの思想を各個別理論領域に細分せず一全体として、しかもその生成のゲネーシスから復元して把みなおそうとし、それによって90年代のはじめの党内でのかれの危機意識、96—8年の客観世界の変化における「事実」認識と実践意欲の強烈化、かれの社会主義構想の基礎にある「場」の考え方、そしてベルンシュタイン固有の「個人」の把握が鮮明に描き出されている。だがここでは生成期のベルンシュタイン修正主義思想をSPD環境において把えようとしているため、視界が狭められざるを得ず、もっとひろいヨーロッパ諸思想との対応やかれの歴史意識が明らかでない。また戦中・戦後のベルンシュタインへの展望——体系全体の理解とともに続稿の課題であろうが——も予示しておくべきではなかろうか。

ローザ・ルクセンブルクについての竹本信弘の研究「ポーランド社会主義運動とその思想」、「ローザ・ルクセンブルクのポーランド革命論」(『経済論叢』98巻1・2号、1966年7・8月)〔21〕〔22〕はローザに対する従来の一切の先入観を排して、革命家ローザ・ルクセンブルクの生成からその全容を見ようとする意欲的労作である。すなわちこの思想家の歴史の中で生きた人格全体をとらえようとして、その思想的出发点にさかのぼり、ポーランド革命にとり組む若きローザの思想と行動をとりあげて、かの女のマルクス主義思想の個

性と真髓をつかむのである。ここではポーランド社会主義運動史における民族主義と国際主義の葛藤の中でのかの女の立場、マルクス・エンゲルスのポーランド革命論のかの女による批判的再構成が詳細に追求され、そこからかの女の現実分析の方法と内容、つまりポーランド社会の客観的物質過程を総体的な世界資本主義分析の視点から把握し、その矛盾をつきやぶるべく戦う主体として、ポーランド・プロレタリアートを配置した初期ローザのマルクス主義思想が、生き生きと描き出されていると同時に、かの女の客観過程の重視、資本主義分析における段階的・構造的特性認識の欠落、あるいはかの女のプロレタリアート像のイデオロギカルな側面もおさえられていて、ローザ思想の全体としてもつ問題性へ迫るための布石が周到になされている。この論文は広い巾と深みをもつスケールの大きなローザ革命思想の研究に、その初期から内在的に取り組んで行こうとするものであるから、いうまでもなく続いてSPD修正主義とかの女の格闘、ドイツ革命におけるローザが、同じく内在的・全体的に追われるであろうが、ルクセンブルギズムの今日的意義からしても、著者による本格的なローザ思想全貌の開明が待たれるのである。

なお、さらにSPD関係のものとして、山口和男に一群の論文がある。「ドイツ社会民主党の農業論争」(『思想』490号, 1965年4月)、「ドイツ社会民主党急進派の革命思想」(『思想』497号, 1965年11月)、「バルヴスの世界資本主義論について」(『甲南経済学論集』8巻1・2号, 1967年7月)、「バルヴスのロシア革命論」(『思想』520号, 1967年10月)(⑳㉔㉕㉖)——ほぼ3年半にわたるこれら4論文は、その内容からして連続論文として取扱ってさしつかえないであろう。このうち㉔は全体の序論的性格をもっている。つまり1894—5年の農業論争を媒介にしてSPD内部の正統派と修正派の端緒を把握し、この両者とは異質な第3潮流(急進派)登場の必然性を検出する中で、その先駆者バルヴス論への展開を予示しているからである。残る3篇は、ローザ、ベルンシュタイン、カウツキー等の研究と並んで、ドイツ・マルクス主義発展過程の個別研究の一環をなすが、単に埋もれた革命理論家バルヴスを発掘し紹介し、未知の対象領域を開拓したというにとどまらない意義をもっている。バルヴスに光をあてることによって、1つにはSPD内での急進派形成が歴史的に跡づけられ、かつ特殊ドイツ的条件下における急進主義の特質がローザ論(㉔㉕)と相まって明確になったこと、第2には世紀転換期からロシア10月革命に至るマルクス主義の創造的展開の1つの典型が

示されたこと、これである。

しかしこれらの論文は、対象とする思想家の理論と実践を内在的に追究する方法をとっているため、当時の社会的・経済的諸関係の実証とか、マルクスの世界市場論・革命論との関係とか重要な論点が捨象されている(同時代者としての晩年のエンゲルスに言及のないのは残念である)。問題はさらに次の点にある。すなわちバルヴスの世界資本主義論と、それに基づいてロシア革命からヨーロッパ革命を展望した革命戦略、およびマッセンストライクからソヴィエト(レーテ)型革命を予想した戦術論、これらが急進主義理論のなかでいかなる位置にあるかを確定し、その論理的意味を明らかにすることである。著者はこの諸論文を、こうした問題に答えるための第1次的アプローチと位置づけているのだが、それでもなお問題は残ると言えよう。たとえば著者はあまりにもSPDに捉われすぎており、またバルヴスからローザという系譜を予想しているかに思われるが、はたしてそうであろうか。農業問題を基底にしたバルヴスの世界資本主義把握と、ローザのそれとは構造の違いがあるし、世界革命戦略においても異なる。またマッセンストライク論とソヴィエト論における「大衆の創意・自発性」という点で、ローザと密着させるのも早計ではなからうか。組織問題をめぐるローザとレーニンの角逐、およびバルヴスの両者との関係から明らかにさるべき問題であろう。いずれにせよ革命家バルヴスと理論家バルヴスを分ける核心は組織論にあり、時代より余りに離れた先行者の悲劇ではなくて、かれの組織理論の弱さにこそ問題があるだろう。

以上のほか、ヒルファーディング研究の序説たる保住敏彦「ドイツ社会民主党と関税問題」(『西洋史学』78号, 1968年7月)(㉗)、それに、オーストリア・マルクス主義を概観した田川恒夫「オーストリア・マルクス主義の多民族共同体論」(『現代の理論』49・50号, 1968年2・3月)(㉘)もあり、今後の詳細な展開が待たれる。

ルカーチとコルシュに関しては、平井俊彦につぎのような一連の論稿がある。「東欧における歴史意識」(『思想』489号, 1965年3月号)、「ルカーチの『ローザ・ルクセンブルク論』」(『甲南経済学論集』5巻6号, 1965年3月)、「カール・コルシュの実践の弁証法」(京都大学『経済論叢』98巻1号, 1966年1月)、「ブハーリンとルカーチ」(京都大学『経済論叢』99巻1号, 1967年1月)、「ルカーチと現代」(出口勇蔵『社会思想史』所収, 1967年, 筑摩書房)、「ルカーチの物象化論」(上)・(下)(『思想』527・530号, 1968年5

月・8月号)〔以下②⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮と略記〕。まず②⑨の両論文において著者は、東欧のマルクス主義の個性と問題性をはらむものとして、ルカーチ思想をとり上げている。その場合、初期のルカーチと現代のルカーチ——左翼急進主義と右翼日和見主義、未来を創造する弁証法と静観的なブルジョア合理主義的弁証法——の相違を念頭におきながら、初期ルカーチを中心に、その階級意識論の構造をつかみ、それが19年革命挫折後の東欧の後進国ハンガリーの状況からくる歴史意識と、第2インター批判の緊急性とによって規定されていること、そしてルカーチの初期の急進主義がローザ・ルクセンブルクの影響とそれへの親近性においてあること、しかしプロレタリア革命の担い手を西ヨーロッパ・マルクス主義者ルクセンブルクが自発性ある大衆に求めるのに対して、ルカーチが階級意識に求め、その集約点たる党に求めてレーニンに左祖する点に、再びその東欧性があわられていることを論証しているのである。また同時に著者は、階級意識の自覚、現実の意識化がただちに現実の変革とはならない点、さらには個人意識から階級意識への進路をどこに見出すかという点に、現代のマルクス主義にもかかわるルカーチ思想の問題性を指摘している。

このように著者はルカーチの東欧性、そして資本主義発展の未成熟でプロレタリアートが現実を展開していないというハンガリーの後進性をかなり強調し、ルクセンブルク支持から批判への移行の契機もそこに求めている(⑩, p.48)のであるが、東欧性といい後進性といい、もう少し実体的規定がなければ、階級意識論という高度に抽象で同時にかきわめて具体的・実践的な概念の次元と、すぐには関連づけられぬのではないか。ローザ批判への移行の契機についても、『批判的注解』の中であげられている、農民問題・民族問題その他いくつかの具体的・実体的な内容に即して検討すべきであろう。

⑪は、ルカーチと同じく1919年ドイツ革命の挫折のちに、変革期における意識の能動的役割を強調して、客観主義的なカウツキーおよびそれを支持したコミンテルンに叛逆した哲学者カール・コルシュをとり上げており、又⑬は、逆にコミンテルンの官製哲学者デボーリンのルカーチ・コルシュ批判、そしてブハーリンの『唯物史観』を検討して、それとの対比の上でルカーチの歴史の弁証法の構造をみている。⑭は未完であって、ルカーチとコルシュの弁証法の捉え方の相違や、一方がレーニンへ他方がルクセンブルギズムへ走る必然性は十分開明されておらず、続稿が待たれる。⑮は、これまでの著者のルカーチ論の総括であるとともに、

さらに階級意識論の対極をなす、ルカーチの社会存在論の把握＝社会の物象化論の構造を分析し、またその他の現代思想における疎外論や知識人論を論評している。⑭⑮は、ルカーチのこの物象化論を、かれの社会形成論・社会存在論とみて、その論理構造と歴史哲学的展開を探り、とりわけ上部構造における物象化＝ブルジョア合理主義とのルカーチの対抗——これについては、すでに水田洋の明快な理解がある(前掲水田, ②, 後篇第1章, p.131)——が示され、この社会の物象化を克服するためのルカーチの構想としての組織論が、残る問題として提出されている。

——以上、著者の所論を簡単かつ強引に要約してしまったけれども、実は著者の論証と表現の仕方は余りに哲学的で晦渋であり、その論旨の追求はひどく困難であった。著者のルカーチへの肉迫は精力的であり気魄にみちているが故に、そのルカーチ理解は今後ますます深化すると思われるが、それに応じて表現が一層平明化する様、評者として希望したい。なお、最近コミンテルンの諸会議の議事録その他の資料が続々と復刻・公刊され、そこでのルカーチの発言を確認しうようになったから、ローザからレーニンへの旋回、1920年代後半以後のルカーチ像への接近も、素材が豊富になったといえよう(たとえば、池田浩士「過渡期の終末—ルカーチ・ノート (1)—」、『長篇小説論の形成と変貌—(2)—』『新日本文学』253・4号, 1968年8月号・9月号)を参照)。

おわりに

マルクス主義の継承と発展は、一般に理論と実践、科学と思想の区別と総合の中で展開されるものであって、自然科学の発展のように直線的ではあり得ない。その限り、マルクス主義思想史の研究と叙述は、きわめて困難な条件を強いられているといえる。にもかかわらず、ここに展望したところを概して言えば、さかんな意欲に燃えた研究が多く、その成果はめざましい。

客観的な社会・経済・政治史に重点をおく方法、理論史、理念史を中心にみる方法、あるいは対象とする思想家の理論と実践を内在的に全体として把んでゆく方法などさまざまであるが、政治的な呪縛から思想を解きはなし単純な系譜論からはなれて、それぞれの個性において捉えようとする姿勢が見える。そのためにそれぞれのマルクス主義思想を、それぞれが対決しようとした歴史的現実との関係において捉え、ひとたびは相対化しあるいは類型化して把握することが必要であった。

特定の時代や段階、あるいは国・社会などそれぞれの状況とかかわらせて思想を位置づける、いわば歴史主義的な分析の仕方は、このように有効であったが、しかし同時に他方ではそういう相違や特殊性をこえて、さまざまなマルクス主義を世界という大きな統一的全

体の部分として、一般化の方向に定置させようとする論理的視角が必要だと思う。そのためには、思想史研究者が自己のマルクス論理の把握をさらに深化させ、また多様に変化する現実の諸相を統一的につかむべく一層鋭い眼をもたなければならないであろう。

日 本 経 済 思 想 史

——古典派経済学のわが国への導入と展開——

真 実 一 男・溝 川 喜 一

I は じ め に

いくらかの皮肉をこめて、日本の経済学史研究が世界的に抜群であり、わが学史学会が世界的に無類といわれる。身びいきでなくても、スミスやマルクス等についての研究水準が世界的にすぐれていることは、容易に承認されよう。しかしこと日本経済思想史に関するかぎり、わが国の研究史はにわかに精彩を欠くものとなる。学史学会においても、スミスやマルクス等の専門家をあげることに苦しまないけれども、たとえば日本のスミス田口卯吉ともいうことになる、その専門家の指名にとまどいがちとなる。そしてこの事態は、学史学会が日本の学史学会であるかぎりなんといっても変則であり、このまま放置さるべきではなからう。

とはいえわれわれはこの分野において、すでに戦前において、(1)本庄栄治郎(『近世の経済思想』昭和6年、『同、続篇』昭和13年)、(2)大塚金之助(『経済思想史(要領)』昭和8年)、(3)住谷悦治(『日本経済学史の一齣』昭和9年)、(4)堀経夫(『明治経済学史』昭和10年)、(5)加田哲二(『明治初期経済思想史』昭和12年)等々の輝かしい先駆的業績をもつのみならず、これらの諸先達は、大塚を除くほかすべて、戦後においても活躍中であるといえよう。しかし戦後には新進の研究者による諸研究もまた育ちつつあり、ようやく日本における日本経済思想史研究の貧困という欠点も克服にむかいつつあるといえるかもしれない。

以下具体的展望に立入るまえに、範囲の限定ならびにいささかの弁明を試みておきたい。

(1) われわれに与えられた標題はもともと「日本経済思想史」であったが、この種の学界展望は従来取上げられたことがなかったので、展望の範囲を戦後にまで遡らせてみた。

(2) しかしこの範囲に入る文献数はおびただしく規定枚数内の処理が不可能視されるに至ったので、主として明治期に限定し、その前後を切捨てるという非常手段をとった。

(3) しかもノッペラボウに明治期をおうことも意味がないと考え、古典派経済学の導入と自由主義経済思想という二本の柱をたて、前者を真実、後者を溝川で分担するということにした。

(4) このため、歴史学派ないし社会政策学派ならびに社会主義思想およびマルクス経済学を切捨てることになったが、これらについては次の機会に取上げられることを期待したい。⁽¹⁾

(1) 歴史学派については、たとえば小林漢二氏の一連の論文〔日本における歴史学派経済学の成立とその展開〕(東北大『経済学』第73号、昭和39年)、「独占化過程における日本歴史学派経済学の発展—ブルジョア的『社会政策』論の確立過程—」(同誌、第77号、昭和41年)、「日本歴史学派における市場問題の展開と低米価—低賃金政策の課題 (1)」(『帝京経済学研究』第1巻第1号、昭和42年3月)があるが、そこでは日本社会政策学会の歴史に重点がおかれすぎて、それと歴史学派との交渉についての面が弱すぎるように思われる。

またマルクス経済学については、たとえば、守屋典郎『日本マルクス主義理論の形成と発展』(昭和42年)と日高晋ほか『日本のマルクス経済学—その歴史と論理—』上下(昭和43年)がある。しかしこの両者には対極的に異なる見解がのべられていて読者をまどわせるが、両者に必要なものはより弾力的な思考法であろう。(真実)

II 古典派経済学導入史

戦前から区別さるべき戦後日本経済思想史のジャンルに経済学導入史とよばれるものがある。このような導入史はなにも古典派にかぎられる必要もないが、現在までのところ古典派優位であり、以下論点をそれらにのみ絞ることにしたい。⁽²⁾

さて戦後古典派導入史盛行の誘因をたずねてみれば、